

日吉台地下壕保存の会会報

第60号

発行 日吉台地下壕保存の会

日吉から松代へ

アジア太平洋戦争末期の戦争遺跡を訪ね、

今後の保存運動のあり方を探る。

8月の戦争遺跡保存全国シンポジウム神奈川県川崎大会が終了し、一息ついた11月3、4日運営委員会のメンバーを中心に8名が、長野県松代大本營の保存をすすめる会との交流を兼ね、松代大本營の見学を行ってきました。そこで今後の保存運動のあり方について貴重な示唆やアドバイスをいただいてきました。以下はその交流・見学のご報告です。

【行程】

11月3日（土）

横浜～東京～

（長野新幹線）～

上田

戦没画学生慰霊美術館
「無言館」

～

長野「きぼうの家」

交流会

11月4日（日）

早朝 長野善光寺参拝～

松代大本營壕）～上田～

東京



上田 戦没画学生祈念美術館「無言館」前にて

交流会から

J R 長野駅から程近くにある「きぼうの家」は松代大本営の保存をすすめる会代表であった故青木孝寿先生のご自宅をお借りして会が事務所として使用しているものです。瀟洒な民家風の建物の1階に30人ほどでも会合が出来る会議室とFAXやTEL、コピー機、パソコンその他事務機材が備わった事務室があり、その会議室で日吉台保存の会と松代保存の会との交流会が行われました。

松代保存の会の懸代表からの歓迎の挨拶の後、日吉を代表して新井団長の謝辞、松代から大日向松代保存の会事局長より、松代大本営の歴史と保存の会の設立から今日に至るまでの経過と現状と課題について伺い、その後、懸会長、嶋村



幹事はじめ幹事の皆様から保存運動の現状と課題について交流、交歓を行いました。以下、その概要です。

【松代大本営の歴史】

千曲川のほとりにある真田10万石の城下町松代に、アジア太平洋戦争の末期1944年11月戦争指導の最高機関である大本営が突如極秘の内に建設され始めた。象山、舞鶴山、皆神山一帯に地下壕が延べ10数キロに渡って掘られ、天皇はじめ大本営、政府各省庁、日本放送協会など国の主な機関を移す計画であった。それは本土決戦を指揮し、「國体護持」を目的とするものであり、その工事は敗戦により未完に終わったと言え、7割5分まで遂行され、「幻の大本営」と巷に言われる規模を遙かに越えた、いわば「一大遷都計画」とも言えるものであった。

【保存運動の経過】

戦後松代大本営の存在は地元の人々や一部の研究者には知られ、調査・研究は行われてきたが、それを保存・公開にまで高めていったのは、よく知られているように地元の高校生とそれを支えた市民の活動によるものだった。1985年地元の高校生が松代大本営の永久保存を訴えて、翌年松代保存の会が結成され、この活動を受けて長野市が観

光事業の一環として象山地下壕の一部を公開するようになってから今年で10年余りになるが、その公開はあくまで観光としての公開であり、史跡、文化財として戦争遺跡を後世に伝える取り組みではない。松代保存の会の運動は、史跡としての保存、公開、平和祈念資料館の建設を求める運動として1986年、日吉保存の会より3年ほど前に始まり、設立以来今年で15年になる。15年の活動の中で行政との交渉、「平和のための信州・戦争展」の開催、研究・調査、見学者の案内、平和祈念資料館の建設活動、出版・広報活動、そして日吉台保存の会も団体加盟している戦争遺跡保存全国ネットワークの中心団体としての活動など多岐に渡る幅広い活動をされてこられた。大日向事務局長からは、設立当初の演劇を通して保存を訴えられ、観客が2千人も来て喜ばれた話や保存運動を通して成長していった高校生の話など保存運動にまつわるエピソードも伺うことが出来た。

【保存運動の現状と課題】

《見学について》 松代大本營には、今日年間10数万人の人々が見学に訪れている。そのうち保存の会で案内されている人数が約2万人程ということである。日吉の活動規模と比べてその人数の多さに驚かされる。いかに松代保存の会の方々が見学・案内に力をそいで活動されているかが分かる。見せていただいた10月のカレンダーには平日、休日を問わずビッシリと案内の予定の団体名とガイドの名前が書き込まれてあった。

案内する団体は高校生や中学生の修学旅行の団体、行政関係者、研究団体など様々だが、中には自衛隊や戦友会などの団体もあるということであった。松代大本營は観光地ということで保存の会以外にも案内をしている団体があり、中には造り酒屋が松代の武家屋敷など他の観光地と合わせて大本營を案内し、最後に自分の店へ連れて行き、商品を買わせるということもあるようである。こうした他団体との競合の中で、本当の意味で松代大本營の歴史的な意義を見学者に伝えられるのは、当初から保存・公開・資料館建設の運動を続けてきた松代保存の会の方々をおいてないと思う。見学は入り口の案内板を読むだけで、誰でも自由に出来るが、案内を聞かなければ「ただの大きな穴」を見てきただけのレベルで通り過ぎていく見学者もいることだろう。これは日吉台の地下壕でも言えるこ



松代大本營の保存をすすめる会
「きぼうの家」の前にて

とだと思う。地元の識者に懇切な説明を聞いて初めて分かる部分が大きいものである。松代大本営の歴史的意義を伝えるため、松代保存の会の方々の今後の更なるご努力に期待し、大いなる声援を送りたい。

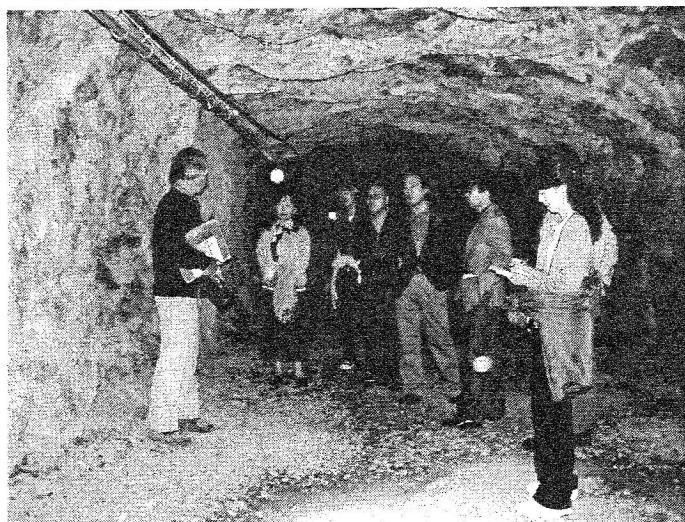
日吉保存の会にとって特に参考になるのは、見学の際のシステムがきちんと出来ていることである。見学の申込書が出来ていて、電話で受け付けた後、FAXで申込書を送り、その際書籍の案内などもし、書類を交換して受付を完了する。松代大本営関係の書籍には専門書から中、高校生向けの案内書などもあり、英語版まで出来ている。更に、最近はガイド（案内者）養成にも取り組まれ、平日に案内できるガイド養成のため、平日に養成の講習会をシリーズで行う取り組みもされている。日吉保存の会でも慶應大学の地下壕整備以降、小中高生などの見学も始まり、見学のシステム、ガイド養成など、どの活動を伺っても、日吉の今後の活動に参考になることばかりであった。

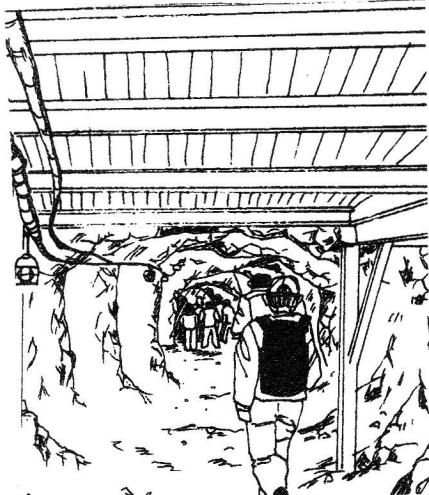
(谷藤基夫記)



松代大本営の保存を
すすめる会との交流会
於 きぼうの家会議室

二日目 象山地下壕で
懸代表から説明を
受ける会員



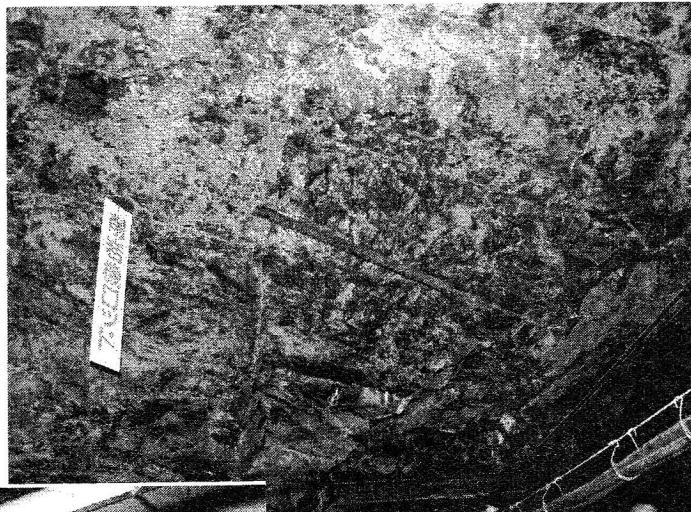


象山地下壕の内部は素堀り、岩盤露出の状態。食事も不十分な中、勤労動員の学生や朝鮮人労働者が工事にあたった。

発破をかけ、削岩機で砕き、トロッコで運ぶ危険な労働が、強制連行された朝鮮人労働者に強いられた。

今も岩盤に突き刺さった
ままの削岩機の先端（ロッド）

他に不発の発破、
朝鮮人労働者が壁面に
書いたハングル文字などが
見つかっている。



天皇の御座所前で。
天皇の御座所は最高級の檜建材を使用してあった。宮大工も驚きの声をあげたという。
更にその地下壕は厚さ1メートルのコンクリートで固められ、10トン爆弾にも耐えられる構造だった。



「無言館」と「きぼうの家」と「松代大本營」 新井揆博

文化の日、私たちは上田市塩田平にある「無言館」で午前のひとときを過ごしました。大自然の懷に抱かれ、十字架型をしたこの美術館には、戦地に驅り出されて、若くして死んだ画学生30余名の遺作や遺品約80点が展示されています。(約300点所蔵)その遺作から若者が戦時を真剣に生きた証を鑑賞し、私は特に油絵「少年飛行兵」から悲壮な覚悟と決意で、死に向かう心証に心を打たれました。

午後、長野市にある松代大本營保存をすすめる会「きぼうの家」を訪問し、松代大本營の概要と同会のこれまで培ってきた深い調査・研究に基づく豊かな戦跡保存運動の経験を学び、大きな励ましを受けました。

翌日、私は松代大本營地下壕内の固い岩肌を見て、闇の中で最も危険な場所で、過酷な強制労働を強いられ、死んでいった朝鮮人労働者を想い、舞鶴山地下壕の「天皇御座所」等と併せた見学で、松代大本營の構築が明確に絶対主義的天皇国家を最後まで守るための本土決戦準備であったことを学びました。全国の多くの地下壕も思想的に見て根底には「国家護持」に連なる砦となっていたのです。沖縄は「国体護持」の時間稼ぎに利用され、捨て石になりました。日吉台(建物・地下壕)はどうだったのか?これからも科学的な調査・研究と全国の研究成果から学んで保存運動に生かすと共に、日吉でも歴史の事実に基づく平和のための案内ができるようにしたいものです。最後になりましたが、松代大本營の保存をすすめる会の皆様に心暖まるおもてなしと案内を心からお礼申し上げます。

無言館が語り継ぐこと 亀岡敦子

長野県上田市まで新幹線でわずか1時間半、東京駅の喧噪を引きずったままの運営委員8名は心の準備も出来ぬ内に、上田の郊外の小高い丘に建つ、僧院のような清らかな美術館の前に立った。入場券売り場もなく、戸惑いながら扉を押すと、無言の絵と遺品、それに見入る無言の人々。溢れるような才能と感受性が、どの絵からも感じ取れる。このような人々を根こそぎにしたのかと何かがこみ上げてくる。「無言館」とはよく名付けたものだ。でもこの絵は実に雄弁に「語り継ぐべきこと」を語り、観る人はそれを伝えようという想いを強くするのではないか。そんな気がする。

松代大本營の地下壕も無言で多くを語っていた。来春、花に彩られる頃、会員の皆さんに呼びかけて、無言館と松代に来たいと思いながら、新雪を冠った山々に別れを告げた。

10/20歴史を学ぶ学習会

日吉の海軍に勤務されていた

元理事生、元通信兵の体験を聞く。(1)

私たちがいま戦争遺跡として保存をすすめている連合艦隊司令部地下壕や地上の諸施設は昭和19年～20年の当時、実際にどのように使われていたのでしょうか。

また、そこで勤務しておられた人たちはどんな想いで働いておられたのでしょうか。私たちは当時日吉で海軍の仕事をなさっていた6名の方々から体験を伺うことができました。

元理事生

穴山郁子さん 網野幸太郎さん 津田つる子さん

平賀富士子さん 渡辺忠則さん (アイウエオ順)

元連合艦隊通信兵 栗原啓二さん

晴天に恵まれたこの日、私たちは午後1時に日吉駅で津田さん、平賀さん、穴山さん、栗原さんをお迎えして日吉キャンパスに向かい、お話を伺いながら、銀杏並木のスロープを上がって、先に第一校舎に来ておられた渡辺さん、網野さんと合流してチャペルまで足を伸ばし、現在の日吉キャンパスの様子を見ていただきました。(この途中歩きながらのお話の中でも昭和20年の4月にグランドで不発の焼夷弾を集めて発火実験が行われたことや、当時第一校舎の外壁がカモフラージュのために黒と灰色のまだら模様に塗られていたことなどを伺いました。)

第一校舎物理教室に入って、それぞれ自己紹介の後、当時のお話を伺いました。進行は私たちの質問にお答えいただく形で昭和19年から20年にかけて日吉に来られた経緯、仕事(任務)の内容日吉での日常生活と空襲の様子、終戦のときのお話など多岐に渡りました。

質疑応答概要

◆日吉で海軍に勤められたいきさつをお聞かせ下さい。

津田さんは昭和19年4月から、昭和20年の終戦のときまで軍令部第3部(情報部)で理事生として働いておられましたが、その当時女性であっても女学校を出れば工場などへ勤めなければならない状況の中で、YWCAで習得された邦文タイプの技能を生かして軍令部の理事生に応募されたそうです。

平賀さん、穴山さんは「当時は"海軍さん"は憧れの的でしたので」(平賀さん)海軍軍人のご親族のツテで日吉に勤めるようになったとのことです。平賀さん、穴山さんは昭和20年7月から終戦直後の「残務処理」の時期まで日吉で軍令部の経理関係の理事生をされていました。軍関係の職員には身元のしっかりした「良家の子女」が採用されていたというお話もありました。

渡辺さんは海軍省の本省（東京、霞ヶ関）で理事生に採用され、転勤で日吉に来られ、（昭和20年2月）網野さんは旧制中学を出られてすぐ、日吉で理事生になられました。（昭和20年4月）が、お二人の所属していた海軍省人事局の越後湯沢移転に伴い、6月には日吉を離れたそうです。当時の男性の理事生はみな次々に兵隊に取られていくため、長い人でも2年か3年しか理事生に在籍していなかったということです。渡辺さんも越後湯沢で出征されました。栗原さんは東京通信隊の通信兵として昭和19年9月に日吉へ来られましたが、最初の命令は「木更津沖に停泊している連合艦隊旗艦『大淀』へ行け。」で、それが、すぐに「日吉へ行け」に変更になって、実際に日吉へ来てみたら連合艦隊の司令部そのものが移転していたということだったそうです。栗原さんは昭和20年の4月まで日吉におられました。皆さんのお話を伺って、当時は学業を終えて就職するにしても軍需工場へ行くか、軍隊へ行くか、理事生の皆さんのように軍関係の職場へ行くかというくらいしか選択肢のない時代であったことを実感させられました。

◆お仕事（任務）はどのようなものでしたか？

津田さんは軍令部第3部の「米国情報担当」の部局におられました。アメリカの短波放送を2世の人たちが傍受し、その内容を語学に堪能な方たち（ハーバード大学から帰国された鶴見俊輔さんなど）が翻訳し、津田さん達が邦文タイプで文書に仕上げていあったそうです。最初は第一校舎の2階で途中からチャペルへ移って、仕事をしておられましたが、仕事は非常に忙しく、「とにかく時間に追われて仕事をしていたので、内容は殆ど覚えていません。原爆のことなども含まれていた筈なのですが記憶してないんですよ。」（津田さん）というお話をでした。

平賀さん、穴山さんは軍令部で「艦隊経費」という仕事をされていました。軍隊や基地から送られてくる経理の書類を整理し直して、上へ上げるという仕事だったそうですが、軍艦が沈められるにつれて、「だんだん帳簿の数が減っていったのを覚えています。」（平賀さん）ということでした。

渡辺さん、網野さんは海軍省人事局の「賜金係」という仕事をされていました。海軍の下士官、兵の戦死者、戦傷死者及び戦病死者の遺族に送る「賜金」の算出をされていたそうですが、「今思うとかわいそうなくらいにわずかなお金でしたよ。」（渡辺さん）ということです。

栗原さんは連合艦隊司令部の通信兵（暗号係）として、地下壕内の暗号室で三交代で任務に就いていました。第一校舎の1階の教室に畳を敷いて寝る場所にしていたそうです。24時間休みなく送られてくる暗号電報を「電信員」が受け、栗原さん達「暗号員」が解読したものを「暗号長」に渡すと、それを地上の寄宿舎にいる将官たちへ届けるわけですが、地上までの階段を昇る手間を省くため、階段の上に針金を張って地上まで文書を吊り上げる装置を作っていたそうです。ちょうどレイテ作戦、神風特攻隊、硫黄島作戦のころでしたが、栗原さんは「レイテの時はどんどん沈められて、こりやあもう駄目だなと思いましたよ。」と語っておられました。やはり皆さんは日を追って濃厚になる敗色を肌で感じておられたようです。（富沢慎吾記）

（以下 次号に続く）

活動の記録

2001年9月～11月

- 9月18日(火) 第4回運営委員会(慶應高校物理教室) 会報59号発送
- 9月21日(金) 日吉台地下壕見学会 NEC社員OB会 35名
- 9月28日(金) 日吉台地下壕見学会 コープ港南平和部会 30名
- 10月7日(日) 日吉台地下壕見学会 世田谷文芸クラブ 30名
- 10月10日(水) 第5回運営委員会(慶應高校物理教室)
- 10月13日(土) 日吉台地下壕見学会 慶應大学生協 24名
- 10月20日(土) 歴史を学ぶ学習会(元理事生、通信兵の方から
お話を聞く会) 慶應高校物理教室
- 臨時運営委員会
- 11月3日(土)～
4日(日) 松代大本営の保存をすすめる会との交流会及び
松代大本営見学会
- 11月10日(土) 日吉台地下壕見学会 社団法人 セカンドライフ協会 30名
- 11月14日(水) 日吉台地下壕見学会 下田小学校6年生105名+職員4名
- 11月18日(日) 日吉台地下壕見学会(保存の会月例見学会) 4名

予定

- 11月28日(水) 第6回運営委員会(慶應高校物理教室) 会報60号発送

★日吉台地下壕保存の会では、月1回定期的に見学会を予定しています。
見学希望の方は右記にお問い合わせ下さい。(045-562-0443喜田)

12月16日(日) 1月27日(日) 2月23日(土)

会計のお問い合わせ：白鶴邦子 神奈川区白幡向町20-49 045-402-9090

その他のお問い合わせ：喜田美登里 港北区下田町2-1-3 045-562-0443

ホームページアドレス：<http://www.geocities.co.jp/HeartLand-Hanamizuki/2402>

日吉台地下壕保存の会会報
発行 日吉台地下壕保存の会
代表 大西 翠
編集 日吉台地下壕保存の会
運営委員会

(年会費) 1,000円以上
郵便振込口座番号00250-2-7-74921
(加入者名) 日吉台地下壕保存の会